

Title	菊亭文庫蔵「源氏詞書」考：東京国立博物館蔵「源氏詞書」との連関
Sub Title	A study of the script in the picture scroll of The tale of Genji in the collection of the Kikutei family : relationship with Tokyo National Museum's "the script in the picture scroll of The tale of Genji"
Author	菅原, 郁子(Sugawara, Ikuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.113, No.1 (2017. 12) ,p.76- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	田坂憲二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01130001-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

菊亭文庫蔵「源氏詞書」考

— 東京国立博物館蔵「源氏詞書」との連関 —

菅原 郁子

一 はじめに

本稿では、専修大学図書館菊亭文庫蔵の『源氏物語』抜書六帖が東京国立博物館蔵菊亭家本の「源氏詞書」と連関性を持つものであることを考察する。

菊亭家とは今出川家の別号であり、藤原氏北家閑院流西園寺家の支流で、家格は清華家、琵琶を家職とし、西園寺実兼の四男である菊亭（今出川）兼季（一二八一～一三三九）を始祖とする。菊亭文庫とは菊亭家に伝わる文書類のことであり、その主な所蔵先には、京都大学附属図書館（一七三二件、二三五七冊）、専修大学図書館（一九四二件、三四四八点）、東京国立博物館（一一一件、七九七点）がある。その他、東京大学史料編纂所、国立公文書館内閣文庫、宮内庁書陵部、四天王寺大学図書館恩頼堂文庫、神宮文庫、静嘉堂文庫、滝川市郷土館、東京都立中央図書館などにも所蔵が確認される。

専修大学図書館蔵「菊亭文庫」は、専修大学創立九十周年に当たる昭和四五年（一九七〇）に古写本類を選定して、当時専修大学文学部教授であった松田武夫氏、広田二郎氏らの推薦により、村口書房（港区麻布）から購入されたものである。

江戸時代を中心として、鎌倉時代から明治時代にいたるまでの詩歌、雅楽、日記などの文書・典籍類が収められている。主なものは和歌写本、歌合、連歌、連句などの詩歌に関するもの八五七点、琵琶、箏、横笛、太鼓、箏譜面などの雅楽に関するもの五三六点、宮中、国家行事、国郡卜定、改元、位階、宣旨、定書、法度、法律などの記録類九〇一点、江戸から明治期にいたる日記二三二点、持ち高、金銭貸借関係、祝儀、家例、家族、親族、家従といった家記三四九点を数える。

こうした貴重な典籍類の中に、『源氏物語』第三部の竹河・橋姫・宿木・浮舟・蜻蛉・手習巻の本文を抜粋した六帖が存在する。専修大学図書館菊亭文庫蔵の『源氏物語』抜書六帖（以下、「専大本源氏抜書」とする）についてはすでに私見を述べている^④。書誌・翻刻を行った結果、専大本源氏抜書は、『源氏物語』の古注釈書の一つである『万水一露』と本文立項の形式や抜書の方法が一致した。しかし、『源氏物語』の本文のみの抽出であり、『万水一露』の注釈部分は全く抜書されていないことから、専大本源氏抜書は古注釈書を抜書することが本来の目的ではないと考えた。さらに抜書の方法が、『源氏物語』の本文部分を紙の表面に書き写し、その裏面は白紙にして一つの巻を完成させていることから、源氏絵（画帖）の折本を想定して、右側に本文を、その左側に絵を後から配置しようと試みたのではないだろうかと結論づけた。つまり、専大本源氏抜書は、江戸時代に菊亭家周辺の依頼による画帖作成にあたっての絵巻の試作課程（詞書と絵）を示す、草稿本の可能性が考えられるのである。

これらのことをふまえて、本稿では比較対象として、東京国立博物館蔵菊亭家本の「源氏詞書」（以下、「東博本源氏詞書」とする）を挙げ、専大本源氏抜書が菊亭家の源氏絵制作の草稿本の一つであったことを明らかにするものである。

二 専大本と東博本の比較検討

まず、専大本源氏抜書と東博本源氏詞書との本文比較を行う。専大本源氏抜書^⑤は、全て一筆、縦二一・四糎、横一四・七糎（半丁分の計測）、字高一八・三糎、料紙は楮紙、元は袋綴本であったように綴じ穴の跡が二箇所ある。丁付は、竹河（四四）・橋姫（四五）・宿木（四九）・浮舟（五一）・蜻蛉（ナシ）・手習（五二）とあり、元々は東博本源氏詞書のように五

十四帖分存在していたと思われるが、私見の限りでは六帖しか現存していない。そこで以下順を追って、専大本源氏拔書と東博本源氏詞書において、六帖（竹河・橋姫・宿木・浮舟・蜻蛉・手習卷）部分の翻刻比較を明示しながら述べることにする。

A 【専大本源氏拔書・竹河卷】^五

たけかは

一 かちかたのわら^{わらへ}はへおりて花のしたにありきてちりた／るをいとおほくひろひてもてまいれり／大空の風にちれとも桜花をのか物とそかきつめてみる／左のなれき／桜花匂ひあまたにちらさしとおほふはかりの袖はありやは

【東博本源氏詞書・竹河・1】^五

竹川

一 かりかたのわらへおりて花のしたにあ／りきてちりたるをいとおほくひろひ／てもてまいれり／大空の風にちれとも桜花をのか物とそ／かきつめて見る左のなれき／さくら花にほひあまたにちらさしとおほふは／かりの袖はありやと
徳川美術館蔵『国宝源氏物語絵巻』「竹河（二）」の源氏絵場面、三月桜の花の盛りに、夕霧の息子である藏人少将が囲碁を打つ玉鬘の姫君たち（大君・中の君）の姿を垣間見る場面である。庭の桜を賭け物として囲碁を打ち、大君（負方）と中の君（勝方）の歌の掛け合いで、勝方の中の君付きの女童が「大空の」と詠みかけたのに対して、左のなれき（負方の大君付きの女童）が「桜花」と和歌で反駁する。専大本源氏拔書の「わらはへ」には「わらへ」と朱で傍記があり、これは東博本源氏詞書の「わらへ」を意識し、参考にしたものと思われる。行頭の「かちかた」「かりかた」、末尾の「ありやは」「ありやと」の一字ずつの違いはあるものの、抜書本文の部分は専大本源氏拔書と東博本源氏詞書はほぼ一致する。

B 【専大本源氏拔書・橋姫卷】

○はしひめ

一琵琶をまへにきてはちを手まさくりにしつゝ、ゐた／るに雲かくれたりつる月にはかにいとあかくさし出たれ／は扇ならてこれしても月はまねきつへかりけりとて／さしのそきたるかほいみしくらうたけに、ほひやか／なるへし

【東博本源氏詞書・橋姫・1】
はし姫

一琵琶をまへにおきてはちを手まさく／りにしつゝ、ゐたるに雲かくれたりつる／月にはかにいとあかくさしいてたれは／扇ならてこれしても月はまねきつへかり／けりとてさしのそきたるかほいみしく／らうたけにほひやかなるへし

徳川美術館蔵『国宝源氏物語絵巻』「橋姫」の源氏絵場面、秋、薫が宇治の姫君たち（大君・中の君）の合奏する姿を垣間見る場面である。東博本源氏詞書には「月にはかに」に「是ヨリモ」という朱書きが見える。本文の内容において、専大本源氏拔書と東博本源氏詞書は一致する。

C 【専大本源氏拔書・宿木巻】

やとり木

一ほにいてぬもの思ふらししの薄まねく袂の露しけくして／なつかしきほととの御そともになをしはかりき給て琵琶給ふ（を）／ひきぬ給へりわうしきてうのかきあはせをいとあはれ／にひきなし以下可除敷 此間詞腔繪本給ふは女君〇ちいさき御木丁のつまよりけう／そくによりかゝりてほのかにさしいて給へるとみまほ／しくらうたけなりちいさき・以下可除敷は、給ふて終／秋はつる野へのけ色もしのす、きほのめく風につけてこそしれ

【東博本源氏詞書・宿木・1】

やとり木

一ほにいてぬ物おもふらししの薄まねく／たもとの露しけくしてなつかしき／ほととの御そともになをしはかりき給て

／琵琶をひきみ給へりわうしきてう／のかきあはせをいとあはれにひきなし／給ふ○女君○ちいさき御木丁のつまよ
り／けうそくによりかゝりてほのかにさしいて／給へるとみまほしくらうたけなり／秋はつる野へのけ色もしの薄
ほのめ／く風につけてこそしれ

徳川美術館蔵『国宝源氏物語絵巻』「宿木(三)」の源氏絵場面、晩秋、菊の花の色づく頃、匂宮の琵琶の音色を中の君が聴く場面である。匂宮が「ほにいてぬ」と歌を詠みかけ、中の君が「秋はつる」と和歌を返している。専大本と東博本はともに「女君」と「ちいさき」の間には補入記号があり、「女君も心に入りたまへることにて、もの怨じもえしはてたまはず」(「宿木」五一―四六五頁)の本文が欠落している。さらに、「以下可除歟」「此間詞除」という傍記が見え、「女君」と「ちいさき」の間の詞は省略すべきか、という意であり、あえて意識的に省略している可能性がある。さらに「女君」の左傍記「ちいさき・以下・可除時は・給ふて終」によれば、「ちいさき」以下を省略する時は、「ひきなし給へは」ではなく、「ひきなし給ふ」で終わるべきであると記されている。こうした一連の専大本源氏抜書の傍記は、すべて東博本源氏詞書を参考にしているものと思われる、本文の内容と同様に傍記においても両者は一致を見せる。

D 【専大本源氏抜書・浮舟巻】

うき舟

一まいりてかくなるときこゆれはかたらひ給へきやうたに／なれば山かつのかきねのをとるむくらのかけに^{あふ}／りといふ物をしきておろしたてまつる／同巻／一夜はいたくふけゆくにこのものとかめする犬の声たえす／人、をひさけなどするに弓ひきならしあやし／きをのことも声して火あやうしなどいふもいと心あ／はた、しければかへり給ふほといへはさらなり／いつくにか身をはすてんと白雲のか、らぬ山もなく／そゆく

【東博本源氏詞書・浮舟・1／浮舟・2】

うきふね

一まいりてかくなんときこゆれはかたらひ／給へきやうたになければ山かつのかき／ねのをとろむくらのかけにあふりといふ／物をしきておろしたてまつる／一夜はいたくふけゆくにこのものとかめする／犬の声たえず人、をひさけなどするに／弓ひきならしあやしきをのことも／声して火あやうしなといふもいと心／あはた、しければかへり給ふほといへは／さらなり／いつくにか身をはすてんと白雲のか、／らぬ山もなく／そゆく

三月末頃、薫の嚴重な警戒体制が敷かれた中、匂宮は宇治を訪れるものの、浮舟には会えずに帰京する場面である。専大本源氏拔書では袋綴じの表面に「同卷」として二つの場面が記されており、本来は「かけにあふ」となるはずの本文の部分が、水に濡れてしまったためか、脱落破損しており、「あふ」の文字の存在確認ができない。しかし、東博本源氏詞書によれば、同じ箇所明確に「かけにあふ」と記されており、確認できる。本文の内容において、専大本源氏拔書と東博本源氏詞書は一致し、漢字仮名の表記も完全に一致する。

E 【専大本源氏拔書・蜻蛉卷】

かけろふ

一あやしうつらかりけるちきりともをつくくと思つ、けな／かめ給夕暮かけろふの物はかなげにとひちかふを／ありとみて手にはとられすみれは又行ゑもしらすきえしかけるふ

【東博本源氏詞書・蜻蛉・1】

かけろふ

一あやしくつらかりけるちきりともをつくくとおもひつ、けなかめ給夕くれ／かけろふの物はかなげにとひちかふを／ありと見て手にはとられすみれは／また行ゑもしらすきえしかけるふ

夏、薫が宇治のゆかりの姫君に思いを馳せる場面である。宇治のゆかりの姫君（大君・中の君・浮舟）たちのはかなさを蜻蛉に喩えて、薫は「ありとみて」と独詠する。専大本源氏拔書の「あやしう」の傍記「く」は、東博本源氏詞書の「あや

しく」を参考にしたものと思われる。本文の内容において、専大本源氏拔書と東博本源氏詞書は一致する。

F【専大本源氏拔書・手習巻】

○てならひ

一秋になりゆけは空のけしきもあはれな^りを門田のいね／かるとてところにつけたるものまねひしつ、わかき女と／
もはうたうたひけうしあへり・ひたひきならずをとも／おかし

【東博本源氏詞書・手習・1】

手ならひ

一秋になりゆけは空のけしきも哀なり／門田のいねかるとて所につけたる物まね／ひしつ、わかき女ともうたうたひ
けうし／あへり○ひたひきならずをともおかし

秋、命を取りとめた浮舟はわが身の上を語ろうとはせず、管絃にも参加せずに憂悶の情を手習にしたためる場面である。浮舟の住む比叡のふもとで、門田の稲を刈り取る若い女たちが歌を興じる小野の秋の風情を描いている。専大本源氏拔書の傍記「是より」「是マテ」、冒頭の朱合点と傍記「り」は東博本源氏詞書を参考にしたものと思われる。傍記の「是より」「是マテ」は、「門田のいね」から「うたひけうしあへり」までを示し、歌語であることを指摘している。本文の内容において、「わかき女ともは」「わかき女とも」の一字の有無の違いは見られるものの、専大本源氏拔書と東博本源氏詞書はほぼ一致する。

三 東博本源氏詞書の書誌と特徴

こうした専大本源氏拔書と東博本源氏詞書の近似性をふまえつつ、東博本源氏詞書の書誌と特徴について述べておきたい。東京国立博物館蔵「菊亭家本」は、福原紗綾香氏（著）によれば、江戸期の写本であり、主に和歌を中心とする詩歌関係資料

と、公家日記資料からなるという。さらに、東京国立博物館蔵「菊亭家本」について知ることができるとして、『帝國博物館 明治廿六年 列品録』（館史資料三八四）と『菊亭家出品書目』（館史資料一三八九、明治二十四年）を挙げてゐる。『列品録』によれば、明治二十六（一八九三）年三月二十三日の当時の菊亭家当主菊亭修季氏（おきすけ）から蔵書売却の申し出があり、博物館側が購入手続きのために決済を得ようとした際の館内何文書があるという。また『出品書目』によれば、明治二十四（一八九一）年六月十一日に出品された書籍「百九部計七百九十七冊」のすべてが売却対象となり、「廿六年四月五日至テ購入ス」との後筆があるという。つまり、東京国立博物館蔵「菊亭家本」は、明治二十六年に菊亭家当主の菊亭修季氏から売却されたものであり、計七九七冊に及ぶ蔵書ということになる。

東京国立博物館に現在所蔵されている「菊亭家本」の列品番号に基づいて作成した菊亭家本の目録に、この『出品書目』の記載内容を加えた福原氏作成の「東京国立博物館所蔵菊亭家本一覽表（こく）」によれば、

N.〇・七六、旧五六四、物語、源氏詞書、一冊、N.〇・七八、列品番号QA―二八五六、源氏詞書、一冊、二〇・三糶×
一四・〇糶、五一丁、袋綴装四ツ目綴、「今出河蔵書」

とある。『出品書目』の七六項目（旧図書番号五六四）の「物語」という分類の中に「源氏詞書」とある。これは現在の東京国立博物館の列品番号七八項目（QA―二八五六）の「源氏詞書」にあたり、一冊綴り（五一丁）で袋綴装四ツ目綴、桐壺巻の抜書冒頭の一丁目に「今出河蔵書」の印章がみえる。桐壺巻から夢浮橋巻までの『源氏物語』五十四帖の原文を数行（一卷につき、基本は二―三場面）ずつ書き抜いたものである。

例えば桐壺巻を見てみる。

桐壺

一 いみしうしのひてこのみこを鴻臚館に／つかはしたり御うしろみたちてつかう／まつる右大弁の子のやうにおもはせて／ゐてたてまつる相人おとろきてあま／た、ひかたふきあやしふ

一 おはします殿のひんかしのひさし東むき／にいたて、くわんさの御座ひきいれの／大臣の御座おまへにありさる

の時にて／源氏まいり給みつらゆひ給へるつら／つきかほのほひさまかへ給はんことおし／けなり

桐壺巻は二つの場面が抜書されており、一つ目は鴻臚館にて高麗の人相見が光源氏の相を観る場面、もう一つは光源氏の元服の儀式の場面である。いずれも、大阪女子大学蔵『源氏物語絵詞』^(二)や京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』^(三)の詞書などの源氏絵に採択される代表的な場面の本文であり、東博本源氏詞書もそれにならって、代表的な源氏絵の場面が抜書されたと考えられる。以下、東博本源氏詞書について、桐壺巻から夢浮橋巻までの抜書された本文の場面絵を、榊原悟氏の「源氏絵帖別場面一覽」^(四)「附 諸本詞書」と比較して作成した一覽表（本稿末【東博本源氏詞書内容一覽】参照）を基に述べる。

抜書された場面数は、基本的には一―三場面面で、特に賢木・蛭巻は四場面、須磨・鈴虫巻は五場面と多いが、数に関しての規則性や特徴はあまり見られない。賢木巻では野々宮の別れ、蛭巻では蛭火に照らされる玉鬘、須磨巻では都を忍ぶ光源氏、鈴虫巻では十五夜の場面など、代表的な名場面の本文を細かく切り分けて記しており、異なる場面数を多く抜書しているわけではないことが窺える。

琵琶を家職とする菊亭のためか、琵琶に関わる五場面（東博本源氏詞書内容一覽）表の明石・1、若菜下・3、橋姫・1、橋姫・2、宿木・1）や、その他に琴や笛を吹く場面なども抜書されている。

抜書は物語の場面の順序で抜書されていない巻が見える。例えば、空蟬巻において、物語上は光源氏が空蟬の姿を垣間見る場面（空蟬・2）から囲碁を打ち終えた空蟬と軒端の萩の会話場面（空蟬・1）へと移るところだが、東博本源氏詞書ではその順序が逆転している。さらに花宴巻のように、光源氏と朧月夜が贈答を交わす場面（花宴・1、花宴・2）は続きの同じ場面であるものの、光源氏の和歌の部分までを含む場合（花宴・1）と含まない場合（花宴・2）を二度に分けて重ねて書き抜いている。つまり、元々書き抜く予定の源氏絵の詞書が限定されておらず、あまり順序にこだわらずにさまざまな源氏絵の詞書を参考にして、その都度そのまま抜き出したものか、あるいは一度詞書を書き抜き出した後に再度、追加して抜書を加えたものであるかもしれない。いずれにしても、源氏絵の詞書を依頼された際、ふさわしい本文部分を書くための参考本といった趣である。

主にどういった源氏絵の詞書が参考にされたかという点、榊原氏の「源氏絵帖別場面一覧」と比較すると、五十四巻の全ての詞書に共通して抜書された源氏絵の詞書がある。それは大英図書館蔵『源氏物語画帖』（住吉如慶筆）（以下、「大英本」とする）である。大英本の詞書が全て一致する形で抜き出されているものが三十六巻、前後は少し欠けるもののほぼ一致する部分（三分の二程度は一致）が抜き出されているものが十八巻である。

部分的な一致を見せる十八例から、例えば若紫巻を見てみる。

【東博本源氏詞書・若紫・1】

す、めの子をいぬきかかしつるふせこの／うちにこめたりつるものとていと口／おしとおもへりこのゐたるおとなれいの／心なしのかゝるわさをしてさいなまる、／こそいと心つきなれいつかたへかまかりぬるいとをかしうやう／くなりつるもの／をからすなともこそ見つくれとてたち／てゆく○下除かみゆる、かにいとなくめやすき／人なめり少納言のめのとそ人いふめるは／この子のうしろみなるへし

【大英本・若紫巻詞書^{二五}】

す、めの子をいぬきかかしつるふせこのうちにこめたりつる物をとていとくちおしと思へりこのゐたるおとなれいの心なしのかゝるわさをしてさいなまる、こそいと心つきなれいつかたへかまかりぬるいとおかしうやう／くなりつる物をからすなともこそみつくれとてたちてゆく

東博本の前半の部分「す、めの子たちてゆく」が大英本と一致するが、後半は「下除」と朱書きの傍記がみえる。おそらく、後半の部分「かみゆる、くなるへし」を除いた「す、めの子たちてゆく」の前半部分が大英本の詞書であることを示しているような注記である。つまり、少なくともこの詞書に注記する際、大英本の詞書が参考にされていた可能性が考えられる。大英本で校訂していたとすれば、東博本源氏詞書は大英本以前に成立していたということになるか。五十四巻すべての詞書がそのまま大英本と一致するようであれば、大英本が成立した以後に東博本源氏詞書は作成された可能性が高くなる。しかしそうだとすれば、直接「是まで云」「下除」などで校訂せずにそのまま書き抜くだけでよいし、物語場面の順序

が錯綜したり、同じ場面の詞書内容を重ねて再度書き抜く必要はないように思われる。つまり、東博本源氏詞書は大英本の成立時期と推定される一六六五～一六六六年までにはすでに成立していた可能性が考えられよう。

また、伝称筆者を見てみると、大英本^{〔五〕}には江戸初期源氏絵の詞書筆者として著名な中御門資熙・道見法親王・飛鳥井雅章・日野弘資・中院通茂・清閑寺熙房らの他に、菊亭家の人物である今出川（菊亭）公規の名がみえる。公規^{〔七〕}（一六三八～一六九七）は当時の政治や楽器類に精通していた人物であり、養父に今出川経季がいる。経季は京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』土佐光吉筆（藤裏葉巻と若菜上巻）や和泉市久保惣記念美術館蔵『源氏物語画帖』土佐光吉筆などの詞書を担当した人物である。その影響からか、公規は大英本の胡蝶巻、同じ住吉派のMIHOMUSEUM蔵（茶道文化研究所旧蔵）『源氏物語絵巻』（住吉具慶筆、五巻、一六七〇～一六七四年頃成立）の朝顔巻の詞書などを担当^{〔八〕}している。

東博本と大英本の詞書において、例えば胡蝶巻は部分的に一致し、朝顔巻は全て一致している。胡蝶巻は部分的一致であるとはいえ、

【東博本源氏詞書・胡蝶・1】

うくひすのうら、かなる音に鳥のかくは／なやかにき、わたされて池の水鳥も／そこはかとなくさへつりわたるにき
うに／なりはつるほどあかすおもしろし○てうは／ましてはかなきさまにとひたちて／山ふきのませのもとにさきこ
ほれたる／花のかけにまひいつる

【大英本・胡蝶巻詞書】

鶯のうら、かなるねに鳥のかくはなやかにき、わたされて池の水とりもそこはかとなくさへつりわたるに急になりは
つるほどあかすおもしろし

後半部分「てうはくまひいつる^{〔九〕}」には、先程の「若紫・1」の「下除」と同意の「是マテニ云」という朱の傍記の指摘があり、前半部分「うくひすくおもしろし」は完全に一致している。つまり、部分的な一致の箇所はいずれも抜書の三分の二以上の一致を見せ、またその余分な共通しない箇所については傍記や注記で校訂されていることがわかるのである。

榊原氏の「源氏絵帖別場面一覧 附 諸本詞書」に掲げられている源氏詞書（サントリー美術館如慶本・大英図書館如慶本・根津美術館伝光起本・白鶴美術館本・チェスタービーティー図書館本・茶道文化研究所具慶本（↓現在はMIHO MUSEUM所蔵本）・MOA美術館具慶四季賀本・具慶四季賀本・東京芸術大学住吉家粉本類『源氏物語画帖集』）九種類のうち、東博本源氏詞書と同じ詞書が五十四帖すべてに存在するのは大英本のみであり、それ以外の八種類とはすべてが一致しないことから、両者の近似性が推測される。

さらに、巻末に作成した【東博本源氏詞書内容一覧】の調査によれば、完全一致や部分一致を見せる詞書が多いのが、大英本の他に、榊原氏が取り上げている、サントリー美術館如慶本（サントリー本）、白鶴美術館本（白鶴本）、MIHO MUSEUM本（具慶本）、東京芸術大学住吉家粉本類『源氏物語画帖集』（芸大粉本）などであることから、東博本源氏詞書は、住吉派の絵師による画帖作成における詞書との共通項が多いと考えられる。

四 おわりに

以上、竹河・橋姫・宿木・浮舟・蜻蛉・手習巻の専大本源氏拔書と東博本源氏詞書とを比較検討した。その結果、専大本源氏拔書と東博本源氏詞書は書き抜いた本文部分がすべて一致することがわかった。

専大本源氏拔書はすべての場面が源氏絵のモチーフとしては一般的な場面であり、菊亭家の画帖作成の草稿として本文が書き写された可能性が考えられる。袋綴の右面（表）に本文を、その左面（裏）に絵を配置することを想定して、表面に本文を書き抜き、裏面を開けて置いたという仮説も成り立つのではないか。つまり、東博本源氏詞書【資料A】が下書き、ノートのようなもので、それから一巻一場面に絞ったものが専大本源氏拔書【資料B1】ということになるのか。ということでは、専大本源氏拔書の【資料B1】（六帖）のツレである源氏詞書【資料B2】（他四八帖分）が当然作られたと推定されるが、それが現存するかどうかは現状ではわからない。前述の榊原氏作成の「東京国立博物館所蔵菊亭家本一覧表」による菊亭家の目録を見る限りでは専大本源氏拔書のツレ【資料B2】は見当たらない。

また、専修大学図書館と東京国立博物館以外で菊亭文庫の主な所蔵先である京都大学附属図書館の菊亭家本の目録「侯爵菊亭家寄託書目録」によれば、『源氏物語』の本文に関する資料は、「源氏物語 葉綴 内一帖零本 五拾四帖ケ15」「源氏物語抄 桐壺、帚木、夢浮橋 参冊ケ16」の二種類が確認できる。しかし、「源氏詞書」という項目は目録には見当たらない。ゆえに、京都大学附属図書館の菊亭文庫には専大本源氏拔書のツレ【資料B2】はないと推測される。どこか別の場所に所蔵されているか、あるいは散佚したかのどちらか、ということになる。

いずれにしても、専大本源氏拔書は、東博本源氏詞書の下書き本から、さらに詞書を念入りに絞って、巻ごとに一〜二つずつを抽出し、白紙部分（絵を配置すること）を想定していることからしても、東博本源氏詞書よりも、さらに画帖制作に近づいた草稿本であったということになる。東博本源氏詞書を基としている専大本源氏拔書は、やはり、菊亭家、あるいはその周辺の依頼による画帖作成にあたっての草稿本の可能性が高いといえる。

注

- (一) 『尊卑分脉』第一篇「兼季公傳」（『新訂増補国史大系』第五十八巻、吉川弘文館、二〇〇一年、一五八頁）、橋本政宣氏編『公家事典』（吉川弘文館、二〇一〇年、一七四〜一七五頁）、『国書人名辞典』第一巻（岩波書店、一九九三年、一九一頁）などを参照。
- (二) 『旧華族家史料所在調査報告書』本編1（学習院大学史料館、一九九三年、四九八〜五〇三頁）、『全国特殊コレクション要覧』改訂版「菊亭文庫」の項目（国立国会図書館、一九七七年、一四〇頁）。
- (三) 『専修大学図書館所蔵 菊亭文庫目録』（専修大学図書館編、一九九五年）。
- (四) 拙稿「菊亭文庫蔵『源氏物語』抜書六帖考」『源氏物語の伝来と享受の研究』武蔵野書院、二〇一六年）。
- (五) 注（四）の拙稿に拠る。

- (六) 専修大学図書館所蔵菊亭文庫「源氏物語古注断簡」(二諸芸、六文学、一九四、第2函一四七、五一八)。
- (七) 東京国立博物館蔵「源氏詞書」(旧図書番号五六四、列品番号QA・二八五六)。
- (八) 新編日本古典文学全集「源氏物語」五卷(小学館、一九九七年)。
- (九) 「東京国立博物館の蔵書 菊亭本の由来」(国立博物館ニュース 第四四〇号、東京国立博物館、一九八四年一月)、福原紗綾香氏「資料紹介」東京国立博物館所蔵菊亭家旧蔵書について」(『MUSEUM』第六二七号、二〇一〇年八月)。
- (一〇) 注(九)の福原氏論に同じ。
- (一一) 注(七)に同じ。
- (一二) 片桐洋一氏編『源氏物語絵詞―翻刻と解説―』(大学堂書店、一九八三年)。
- (一三) 京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』土佐光吉筆(勉誠社、一九九七年)。
- (一四) 榊原悟氏「住吉派『源氏絵』解題―附諸本詞書―」(『サントリー美術館論集』第三号、サントリー美術館、一九八九年、一二五―一四五頁)。
- (一五) 注(一四)の榊原氏論掲載、大英本の若紫卷詞書の翻刻資料(二四九頁)に拠る。
- (一六) 大英本に関しては、辻英子氏『在外日本重要絵巻集成』(笠間書院、二〇一一年)に詳しい。
- (一七) 今出川公規については、田中幸江氏「江戸期の菊亭家当主の日記『公規公記』について―今出川実種による蔵書整理と書写活動―」(『専修国文』第九〇号、二〇二二年一月)を参照。
- (一八) 注(一四)の榊原氏「筆跡伝称筆者名一覽」、高橋亨氏「近世初期『源氏絵』と詞書筆者について」(『中古文学』第八四号、二〇〇九年十二月)の「源氏絵詞書伝承筆者一覽」を参照。
- (一九) 京都大学附属図書館HP・特殊コレクション「菊亭文庫」(<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>)によれば、京都大学附属図書館蔵の菊亭文庫は、鎌倉時代から江戸時代に至る歌道、音楽、家記、有職故実書、『源氏物語』『十訓抄』など国文学書を含み、計二三五七冊からなる。詳しい解説は『京都大学附属図書館六十年史』(京都大学附属図書館、一九六一年、二〇六―二〇七頁)にある。

〔付記〕源氏詞書の閲覧・調査にあたりましては、専修大学図書館、東京国立博物館の関係各位に大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

【東博本源氏詞書内容一覧】

	巻名	詞書の場面内容	大英本詞書との一致 (◎完全一致、○部分一致)	物語 の進 行順	専大 本と 一致
1	桐壺-1	鴻臚館にて高麗の相人、光源氏の相を観る	◎		
2	桐壺-2	光源氏の元服の儀式	*白鶴本と同じ		
3	帚木-1	左馬頭の体験談-木枯の女談		2	
4	帚木-2	方違えの夜、光源氏、空蟬の寝所に入る		3	
5	帚木-3	雨夜の品定め-女性談議	◎	1	
6	空蟬-1	囲碁を打ち終わり、空蟬と軒端の荻、会話を交わす		2	
7	空蟬-2	囲碁を打つ空蟬の姿を光源氏が垣間見る	◎	1	
8	夕顔-1	夕顔の花を手折らすと、女童が出てきて扇を差し出す		2	
9	夕顔-2	光源氏と中将のおもとの贈答		3	
10	夕顔-3	光源氏、乳母の家の隣家に咲く夕顔を見て手折らす	◎	1	
11	若紫-1	光源氏、逃げた雀を追って出た若紫を垣間見る	○前半は同じ		
12	若紫-2	暁方、光源氏、北山の僧都と対座し、和歌を贈答			
13	末摘花-1	頭中将、光源氏の後をつけ、おどし戯れて贈答	◎		
14	紅葉賀-1	行幸の試案に、光源氏、青海波を舞う		1	
15	紅葉賀-2	光源氏、紫の上と相睦ぶ		3	
16	紅葉賀-3	青海波を舞う光源氏、異様なまでの秀でた麗姿	◎	2	
17	花宴-1	桜花の宴の月夜、光源氏、朧月夜に遭う2	*白鶴本と同じ	2	
18	花宴-2	桜花の宴の月夜、光源氏、朧月夜に遭う1	◎	1	
19	葵-1	葵の上の一行、六条御息所の車を乱暴する	○後半は同じ		
20	葵-2	葵の上の一行、六条御息所の車を押しつける	*白鶴本、芸大粉本と同じ		
21	葵-3	賀茂祭の日、光源氏、紫の上の髪を削ぐ			
22	賢木-1	光源氏、六条御息所を訪れた野宮の情景1			
23	賢木-2	光源氏、六条御息所を訪れた野宮の情景2			
24	賢木-3	野宮において、光源氏と六条御息所の贈答1	*白鶴本と同じ		
25	賢木-4	野宮において、光源氏と六条御息所の贈答2	◎		
26	花散里-1	光源氏、中川の辺りで女と贈答2		2	
27	花散里-2	光源氏、中川の辺りで女と贈答1	◎*具慶本とも同じ	1	
28	須磨-1	光源氏、海の見える廊に出て、雁を眺める1		2	
29	須磨-2	八月十五夜、光源氏、従者と唱和する		4	
30	須磨-3	春巡り来て、光源氏、南殿の桜を想う		5	
31	須磨-4	光源氏、海の見える廊に出て、雁を眺める2	◎	3	
32	須磨-5	須磨の秋、憂愁の日を過ごす光源氏の麗姿		1	
33	明石-1	琴を弾く光源氏、琵琶を弾く入道	*具慶本と同じ		
34	明石-2	八月十三夜、光源氏、明石の君のもとへ向かう	◎*白鶴本、芸大粉本とも同じ		
35	滯標-1	五月雨の頃、光源氏、久しぶりに花散里を訪れる2		2	
36	滯標-2	光源氏一行、住吉参詣		3	
37	滯標-3	五月雨の頃、光源氏は久しぶりに花散里を訪れる1	◎*具慶本とも同じ	1	
38	蓬生-1	光源氏、惟光に導かれて末摘花邸に入る	○後半は同じ		
39	関屋-1	光源氏、逢坂の関にて空蟬一行に逢う	○後半は同じ、*白鶴本と同じ		
40	絵合-1	帝の御前の絵合、帥宮が判者を勤める		2	
41	絵合-2	帝の御前の絵合、藤壺中宮も参加する		3	

	巻名	詞書の場面内容	大英本詞書との一致 (◎完全一致、○部分一致)	物語の進行順	専大 本と 一致
42	総合-3	帝の御前の絵合、光源氏、権中納言ら参内する	◎	1	
43	松風-1	光源氏、桂の院に趣き、饗応する	◎		
44	薄雲-1	光源氏、明石の姫君を二条院に迎える	◎*具慶本とも同じ	1	
45	薄雲-2	光源氏、大堰を訪れ、明石の君と贈答		3	
46	薄雲-3	光源氏、明石の姫君を慈しむ	*サントリー本、白鶴本と同じ	2	
47	朝顔-1	光源氏、女童を庭に下ろして雪まろがしをさせる		3	
48	朝顔-2	雪の月夜、光源氏、紫の上と昔今の女の評をかわす	◎*サントリー本、白鶴本と同じ	2	
49	朝顔-3	雪の月夜に照らされる光源氏の麗姿	*具慶本と同じ	1	
50	少女-1	夕霧と雲居の雁、仲をささやかれる	○後半は同じ	1	
51	少女-2	秋好中宮、箱の蓋に紅葉を載せて紫の上に送る	*白鶴本と同じ	3	
52	少女-3	夕霧と雲居の雁、仲をささやかれる		2	
53	玉鬘-1	玉鬘ら、長谷寺に参詣し、右近と再会する	○後半は同じ		
54	玉鬘-2	光源氏、正月衣裳を六条院の女性たちへ配る			
55	玉鬘-3	光源氏、紫の上に女性たちへ贈る正月衣裳を頼む			
56	初音-1	新春の六条院、光源氏と紫の上の贈答		1	
57	初音-2	新春の六条院、光源氏、明石の君を訪れる		3	
58	初音-3	新春の六条院、子の日、女童たち、庭で小松を引く	◎	2	
59	胡蝶-1	秋好中宮の御読経、紫の上、桜と山吹を贈る	○前半は同じ		
60	螢-1	光源氏、放った螢の光に玉鬘の美しい姿を見る	○後半は同じ	2	
61	螢-2	螢兵部卿宮と玉鬘の贈答		3	
62	螢-3	六条院において、馬場の競射を催す		4	
63	螢-4	螢兵部卿宮、玉鬘の気配に心をとめる		1	
64	常夏-1	光源氏、釣殿で涼をとり、夕霧や内大臣の子息と歓談	◎		
65	篝火-1	初秋、光源氏と玉鬘、琴を枕に寄り臥す			
66	篝火-2	篝火を焚いた庭の風景			
67	篝火-3	光源氏と玉鬘、篝火の歌を贈答	◎		
68	野分-1	夕霧、野分の風が吹く中、微笑む紫の上を垣間見る			
69	野分-2	夕霧、光源氏の使いで秋好中宮を訪問	○後半は同じ		
70	行幸-1	大原野の行幸		1	
71	行幸-2	鷹狩不参の光源氏に帝より雉一対が贈られ、贈答		3	
72	行幸-3	大原野の行幸、親王や上達部の鷹狩姿	◎*芸大粉本とも同じ	2	
73	藤袴-1	夕霧と玉鬘、大宮の喪に服した同じ鈍色姿			
74	藤袴-2	夕霧と玉鬘の贈答	◎*具慶本、サントリー本とも同じ		
75	真木柱-1	北の方、鬚黒に火取の灰をかける1	○後半は同じ		
76	真木柱-2	北の方、鬚黒に火取の灰をかける2			
77	梅枝-1	螢兵部卿宮に光源氏、直衣と薫物を贈る1	*芸大粉本と同じ	2	
78	梅枝-2	螢兵部卿宮に光源氏、直衣と薫物を贈る2	◎	3	
79	梅枝-3	薫物合、螢兵部卿宮、朝顔の斎院の黒方を判じる		1	
80	藤裏葉-1	内大臣、藤花の宴に夕霧を招いて歌を交わす	○後半同じ、*サントリー本と同じ		
81	若菜上-1	柏木、女三の宮を見る1			
82	若菜上-2	柏木、女三の宮を見る2	◎*芸大粉本とも同じ		
83	若菜下-1	柏木、女三の宮の唐猫を手に入れ、愛玩1			
84	若菜下-2	柏木、女三の宮の唐猫を手に入れ、愛玩2	◎*芸大粉本とも同じ		
85	若菜下-3	女楽の合奏、明石の君の琵琶、絶賛される			

	巻名	詞書の場面内容	大英本詞書との一致 (◎完全一致、○部分一致)	物語 の進 行順	専大 本と 一致
86	柏木-1	致仕の大臣、柏木のために加持祈禱する			
87	柏木-2	致仕の大臣、聖と声をひそめて話す	◎*具慶本とも同じ		
88	横笛-1	朱雀院、女三の宮へ山菜に添えて歌を贈る			
89	横笛-2	光源氏、無心の薫の姿に微笑む	○後半は同じ		
90	鈴虫-1	光源氏、女三の宮と和歌を詠み交わす			
91	鈴虫-2	光源氏、女三の宮と「すずむし」の歌を詠む1		1	
92	鈴虫-3	中秋の十五夜、光源氏、琴の琴を弾く			
93	鈴虫-4	光源氏、女三の宮と「すずむし」の歌を詠む3	◎	3	
94	鈴虫-5	光源氏、女三の宮と「すずむし」の歌を詠む2		2	
95	夕霧-1	夕霧、小野に落葉の宮を訪れる	◎		
96	御法-1	死期を予感する紫の上、明石の君と歌を交わす			
97	御法-2	桜の下の蘭陵王の舞、紫の上、感慨深く眺める	○前半は同じ		
98	幻-1	光源氏、紫の上の文段を焼く	○後半は同じ		
99	幻-2	光源氏、「死出の山」の独詠歌			
100	匂宮-1	六条院における賭りの還饗	○後半は同じ		
101	紅梅-1	紅梅の大納言、匂宮に意中を伝える	◎*サントリー本とも同じ		
102	竹河-1	桜の下、蔵人少将、姫君たちを垣間見する			○
103	竹河-2	大君参院、薫の未練	◎		
104	橋姫-1	月の下、薫、宇治の姫君たちを垣間見る	○後半は同じ	2	○
105	橋姫-2	八の宮、大君に琵琶、中の君に箏の琴を教える		1	
106	椎本-1	阿闍梨、例年通り、姫君たちに炭を届ける		2	
107	椎本-2	匂宮、初瀬詣での帰途、夕霧の宇治別邸に中宿り	◎	1	
108	総角-1	匂宮、紅葉狩を口実に宇治訪問		3	
109	総角-2	宇治邸の夜明け、薫と大君の贈答	◎	2	
110	総角-3	八の宮の一周忌、薫、大君に恋情を訴える		1	
111	早蕨-1	阿闍梨から、中の君に蕨や土筆が届く	○後半は同じ		
112	宿木-1	匂宮、中の君と薫の仲を疑い、琵琶を弾く	○前半は同じ		○
113	東屋-1	薫、女二の宮へ宇治の紅葉を手折る		2	
114	東屋-2	中の君、物語絵を見せて浮舟を慰める	◎	1	
115	浮舟-1	匂宮、野犬におびえる		2	○
116	浮舟-2	匂宮、蔽戒の宇治に赴くが浮舟に遭えず		3	○
117	浮舟-3	匂宮と浮舟の「橘の小鳥」の贈答	◎	1	
118	蜻蛉-1	薫、宇治の姫君たちを想い、人生の儚さを想う		3	○
119	蜻蛉-2	薫、氷を手につく女一の宮を垣間見る	◎	2	
120	蜻蛉-3	薫と匂宮を見舞う		1	
121	手習-1	浮舟、小野にて不幸な半生を回想	◎		○
122	手習-2	妹尼、琴の琴を弾き、中将が笛を合わせる			
123	夢浮橋-1	母尼、浮舟に薫の手紙を見せる			
124	夢浮橋-2	浮舟、薫の手紙を見て、人違いと返事を拒む	◎		